

建設関連産業の 未来のための 技術評論

藤盛 紀明

NPO 国際建設技術情報研究所 理事長
秋田産業サポータークラブ 会長

山中教授、ノーベル賞受賞と鉄骨産業の未来

2010年10月9日（火）、日本国中の多くの新聞が第1面に「山中教授ノーベル賞」の大見出しを掲げた。山中教授の信条・哲学は“明確な展望を持って、一生懸命働け”である。

シャープの創始者、早川徳治翁の生き様は「99回失敗しても100回目に成功すれば成功！」と言うものであった。彼は常に「夢と希望」を持って「達成するまで情熱を続ける」ことがいかに大切かを最も体現した人物である。

筆者の現在の夢は「鉄骨ファブリケーター産業に働く人々が幸せになること」である。その活動の一つが「鉄骨精度測定指針」の作成であった。この指針の作成では、製作側の意見を十分取り入れ、従来の発注者・設計者・大学関係者側からの発想に偏った規準ではなく、製作者側の意見も十分反映されるものを考えた。当時、全国鉄構工業連合会（略称・全構連、現全国鐵構工業協会）の何人かの人には、全構連自らが各種規準を作成して、「我々はこの基準で品質を確保する。安くて良いものだから是非購入してほしい！」と訴えるべきだと提案したが、未だ実現していない。この連載は日本の鉄骨ファブリケーターの未来戦略を探す旅である。是非関係者にはお読み頂きたい。

2010年10月9日（火）、日本国中の多くの新聞が第1面に「山中教授ノーベル賞」の大見出しを掲げた（図1）。国内外の課題が山積み、逼迫状態にある日本の現状を吹き飛ばす朗報だった。山中教授の研究テーマ、iPS細胞については新聞テレビで繰り返し報道されたのでここでは語ることはしない。山中教授のノーベル賞は国民に大きな夢を与えた。「夢を持つこと」「成功するまで情熱を持って努力すること」は人間にとって、人生にとって最も大切なことである。本誌で連載した「建設業（受注産業）のMOT」の最後の章も「夢の実現」でこのことを語った。

山中教授は“明確な展望を持って、一生懸命働け”が信条・哲学であり、このことは米国留学時代の恩師グラッドストーン研究所トーマス・イネラリテイ教授の言葉“ビジョン・アンド・ハードワーク”の実践の賜物であった。

先月号の連載で、筆者が会長を務める「秋田産業サポータークラブ」では秋田県の雇用促進のためには「大手企業の工場誘致にこだわらず県内資源を活用したベンチャー企業の立ち上げ」とであると答申し、そのためにベンチャーマインドを有する若者の教育・支援を行う「寺子屋」を東京で開催することを報告した。この寺子屋は「集え秋田を創る若者よ」を掲げ、2012年12月1日（土）、大井町駅前の「きゅうりあん」で第1回が開催された。筆者は主

催者の一人としての挨拶で、集まった若者（実は50代の人も参加した）に「夢と夢を実現するための情熱・努力」について語った。

筆者の話は勿論、山中教授の「明確な展望を持って、一生懸命働け！」で始めた。さらにどんな分野でも成功した人々のすべてが「まず夢を持ち、七転八起」して成功に至っている具体例を挙げて話した。特に参加者に力を入れて話したのはシャープ創業者の早川徳治翁の人生であった。世上では松下電器を起こした松下幸之助翁の生い立ち、向上心と苦勞、努力が喧伝されているが、筆者は早川翁の方がより苦勞し、努力したと思っている。

シャープは筆者の現役時代、最も大切な得意先で、工場建設や製造ラインのための技術開発を一体となっていた。シャープ亀山工場のクリーンルームのために、製造装置がそっくり入るクリーンルームを新設したほどであった。シャープ製品の建設活用のための応用開発も設計本部と共同して行った。そのため、シャープの多くの役職者、経営者との付き合いがあり、創業者の早川徳治翁の話は身体に染み込むほど聞いていた。

早川徳治は明治26年（1893年）に東京日本橋でちゃぶ台製造業の末っ子として生まれた。母親の病氣と家業の衰退のため2歳半で店に出入りしていた貧しい家に養子に出された。しかし養子

先の奥さんが5歳の時に亡くなり後妻が来た。この後妻はとんでもない人物で徳治を殴る、蹴るの虐待をする上、真冬に便所の肥溜に落とし放置した。

近所の人がようやく助け出したが、後妻は臭いと言って真冬に水をかけ続けたそうである。あまりのことに隣の盲目の女行者が徳治をかざり職人の丁稚として奉公させた。ここで徳治は夢を持って懸命に働き、18歳の時にベルトのバックルを発明した。このバックルは大成功し、さらにに22歳の時にシャープペンシルを発明する。会社も大発展し、家族も出来て万々歳であったが、大正12年（1923）、徳治30歳の時に関東大震災が発生した。この大震災で工場は焼け、妻と二人の子供を失った。借金の返済のためシャープペンシルなどの特許を売り払い、単身大阪へ移った。大阪でも借金取りに追い回され脅され続けたが、常に夢と希望を持ち鉱石ラジオを創って大成功を収め、現在のシャープを設立した。この後も徳治には多くの苦勞が押し寄せたがすべて跳ね返していった。彼の生き様は「99回失敗しても100回目に成功すれば成功！」と言うものであった。常に「夢と希望」を持って「達成するまで情熱を続ける」ことがいかに大切かを最も体現した人物である。このDNAを引き継ぐシャープは現在の大困難を必ずや克服するものと筆者は信じている。

筆者の若い時の夢は「大地震でも安

全な建物を造ることに寄与する」であった。そのために建築鉄骨と鉄筋のガス圧接を研究分野として選択し、長年研究開発を行ってきた。この両分野の経営者や技術仲間と語り合ううちに、この両分野の企業の発展を大きく願うようになった。鉄骨の中樞を担う企業の団体として全国鉄構工業連合会（現全国鐵構工業協会）が設立され、参加会社数は最盛期4千数百社であった。しかし、現在の構成会社数は2,256社とほぼ半減になっている。

筆者の夢は「鉄骨と圧接の品質管理」の研究テーマから「これらの産業に働く人々が幸せになること」に変化していった。その気持ちもあって30年程度前に専門誌で全構連の活動の在り方、鉄骨ファブリケーターの経営者の経営姿勢の在り方について批判し、全構連の新しい活動方針・鉄骨ファブリケーターの経営姿勢を提案し、業界発展のために情熱を持って行動すべきとした。しかし、当時の全構連のトップから大変なお叱りを受けた。彼は筆者の勤務する会社のトップとネットワークがあり、筆者の発言にクレームを述べたようであったが、さすがに勤務先の経営者から筆者が注意されたことはなかった。

当時、筆者はゼネコン各社の厳しい受注競争を勝ち抜くため、研究開発・技術商品開発の最前線で戦っていた。建設ビジネスは「どんな良いにものでも高いものは売れない・どんなに安くても悪いものを造ってはいけない」が基本である。5万円・10万円レベルの買い物

ではないからである。受注につながるコストを確保するため、例えば構造物についても多彩な開発を行ってきた。鉄骨が高ければより安価な革新的なRC構法・先進的なPC構法などを開発し提案してきた。どんな理由があっても発注者に期待に応えないものは淘汰される。

鉄骨ファブリケーター経営者への提案が効果を持たなかったので、筆者は鉄骨の過剰品質を避けるために建築学会で新しい活動を始めた。その一つが「鉄骨精度測定指針」の作成であった。この指針作成では、製作側の意見を十分取り入れるために鉄骨ファブリケーター側の委員に多く参加頂き、委員会でも皆、立場を超えて自由に討論することとした。従来の発注者・設計者・大学関係者側からの発想に偏った規準ではなく、製作者側の意見も十分反映されるものと考えた。さらに全構連の何人かの人には、全構連自らが各種規準を作成して、「我々はこの基準で品質を確保する。安くて良いものだから是非購入してほしい！」と訴えるべきだと提案したが、未だ実現していない。

生産活動では計画や設計段階での工夫が最もコストダウン効果を出す。そのため建築学会の指針作成委員会を中心に鉄骨関連の発注・設計者・生産者の産官学のすべての人々が参集するネットワーク（サンプリング会）を結成した。発注者を含め生産関連のすべての人が情報を共有し製作しやすく安価で両品質の鉄骨ができるように考えた。しかし、日本ではビジネス分野でも学者を

尊重する風潮があり、このネットワークの本質がある人々からは誤解され、筆者とその仲間がリタイアしてからは退潮している。

筆者はアジアの時代をかなり早い時期から予測しアジアにおける鉄骨生産の現状を調査してきた。その状況から日本の鉄骨ファブリケーター業界もアジアに目を向けるべきと主張してきた。本誌でも中国における鉄骨ファブリケーターについて報告した（文献1）。アジア各国の鉄骨に詳しい人と座談会を持った（文献2）。しかし、筆者の気持ち現在の鉄骨ファブリケーター経営者に伝わったようには思われない。

筆者は早川徳治翁の生き様に感銘し、この2業種の発展を支援する活動は今後も継続する。本連載もその活動の一環である。3年前に鉄筋ガス圧接業の未来戦略を若手経営者達と検討した。先日答申のフォロー会議（業者組合側の主催）を持ち彼らと懇談した。彼らは筆者が提案した未来戦略の一つである「総合鉄筋接合業者」や「革新的鉄筋定着部材販売ビジネス展開」などを推進しつつあり、思いのほか、元気であった。新しいうねりはよそ者、若者、女性が行く。鉄骨ファブリケーターの経営にもよそ者、若者、女性ももっと参加することを期待する。（図2）

参考文献

- 1) 藤盛紀明「連載第18回 建設関連産業の未来のための技術評論 建設ラッシュの中国大連で考える」『鉄構技術』2012年1月号
- 2) 「座談会 アジアの中の日本の建築鉄骨」『鉄構技術』2011年11月号



図1 山中教授ノーベル賞
(読売新聞2012年10月9日)



図2 富士山と東京スカイツリー
(千葉県非破壊検査研究会 立川克美事務局長提供)